

都市化に伴い、豊かな自然だけでなく、人間関係や人の心も失われつつある。県内にも都市化の波は押し寄せ、かつては考えられなかった事件・事故が続出している。そんな中で注目されている先住民の知恵・生活は、高度経済成長以前の里山の生活にもつながる要素がある。かつて私たちが「方三里」の生活をしてきた時代に思いをよせつつ、この報告に目を通してみたい。

心理学とシャーマニズムの融合説くグレイ博士来日

他者・自然との関係重視を



グレイ博士

ニズムの中に、限界を乗り越える答えを見いだしたという。

むしばまれた現代人の心

先住民の知恵に学べ

相次ぐ中高年の自殺や凶悪化する少年犯罪、理不尽な家庭内暴力―現代人の心はむしばまれている。しかし、専門家たちも明確な解決策を見いだせず、事態は深刻さを増している。初来日した米国の臨床心理士で、儀式を通じて自然界と人間をつなぐシャーマンでもあるレスリー・グレイ博士は、他者や自然との関係を重視した先住民の知恵に学ぶべきだと説く。

グレイ博士は米国先住民出身。大学院で心理学を学んだが、精神分析やその解釈にとらわれ過ぎ、身動きが取れなくなった既存の心理学に行き詰まりを感じて、自らの先祖が伝える、慣れ親しんできたシャーマ

の輪」の前に座り、博士が打つドラムの音を聞きながら、解決の道を探る。

現在、グレイ博士が最も危ぶめるのは、地球規模の環境破壊。ただ、「人がいなくなる過程で、自然、そして地球とつながっている



>15<

山崎豊子さんの小説「暖」は八世紀の「純日本紀」。

「蝦夷須賀君古麻比留」は、今も全国に根強いファンをもち人気食品だ。

北海道・道南産の最高級マコンプの真ん中の部分だけを、三ツ角ほどの正方形にした乾燥塩昆布。黄色い包装紙は、ムックリ（竹製の臼）を弾くアイヌ女性の姿を描き、ふちにアイヌ文様をあしらっている。

小倉屋山本の創業百五十年記念誌「なにわの昆布の物語」(一九九八年発行)は、産地の蝦夷地(えぞち)から日本海を経て天下の台所・大阪へ、さらに昆布料理を発達させた沖繩へと至る「コンブロード」の歴史に目を注いでいる。

「昆布」という文字が日本

南北つなぐ昆布ロード

ムックリを弾く女性



ムックリを弾くアイヌ女性を包装紙に描いた小倉屋山本の「えびすめ」

ことを思い出し、地球への感情移入ができる。これが地球の愛護につながる。彼らと、博士は指摘する。

「つまり、個人や地球を救うのは救世主でもクル(宗教指導者)でもなく、自分自身だ」という。

また、日本だけでなく米国でも少年による凶悪犯罪が多発している。グレイ博士は「日本の事情は分から

だ。平安時代の『倭名類聚』などによると、昆布は縄文・ヒロメ、エビスメと二通りに読まれた。メはワカメのメ、食用の海藻のこと。エビス(蝦夷)の人々が国に納めたメがエビスメなのだとチユプチセコルさんは説明する。

大阪中央区北浜のオフイス街の一角に、岡山教育委員会が建てた「大阪俵物など象徴的に描かれて

物と呼ばれた干しなまこ、下しあわび、ふかひれなどを示して商売に役立てたの貴重な海産物が、七七

愛媛新聞社は今年9月に創刊125周年を迎えます。同時に、生誕して45周年にも当たります。この節目を記念して、「てかがみ」45周年記念文集」を発行することにしまし

記念文集の原稿募集

締め切りは7月

た。次の要領で原稿を募集します。募集期間は7月10日まで。記念文集は今年秋の「てかがみ全県大会」に合わせ、10月下旬に出版の予定です。

てかがみ



五月十二日快晴。第二回しまなみ春風ウォークに参加した。今年は、Dコースの宮浦港から、多々羅しまなみ公園までの八きに、上人と友人計四人で挑戦した。島特有の潮の香をひいた風と、美しい新緑が何ともいえない。

歩き終えて、出発地の糸山に到着して出迎えてくれたのは、おい